小石原焼の里の生業・観光・風景の持続に関する調査研究

九州産業大学　学生会員　永本海里・九州産業大学　正会員　山下三平
九州産業大学　非会員　木村隆之・九州産業大学　非会員　栗田融

1. はじめに

コロナ禍が長引く中、観光業は来訪者の移動制限を繰り返し受けている。産業観光の産地では、生業の持続も危ういと想像される。とくにこれまで作った製品を店頭販売することに重点をおいてきた伝統工芸の産地の状況が懸念される。このような産地では、観光に寄与する風景の価値が高かったはずだが、それもまた、大きな影響を受けているだろう。ウィズ/アフターコロナの模索が続くなかで持続可能な社会を構想するとき、そのような産地の生業・観光・風景の現状を知ることは重要と考えられる。

そこで本研究は民芸の里として知られる小石原焼の里を対象とし、その生業・観光・風景の現状と窯元の意思を追究することを目的とする。

2. 方法

小石原焼の里は福岡県朝倉郡東峰村に位置し、陶器協同組合に所属の 44 軒が窯業を中心に生計を立てている[1)]。現在、コロナに対応するため SNS による販売に力を入れている。感染者数の減少した時期には自然を求める人々により一定の賑わいを取り戻した。しかし年間売上の半分に上るといわれる「民陶むら祭」の中止により以前の活気は見られない。

こうした中、本研究は 44 軒の窯元に、里の現状と職人らの意思を尋ねる調査を実施した（期間：令和 10 月 24 日～11 月 20 日）。一軒につき 2 式の調査票を留置きし、郵送で返送してもらった。用紙には QR コードでの回答も可能にした。

表-1 に調査項目の概要を示す。本稿ではとくにコロナによるプラスとマイナスの影響と今後の見通し、および里の観光と風景についての結果を以下に叙述する。

表-1　アンケート項目の概要

（1）属性	（2）コロナの影響	c）今後の見通し
性別	a）作陶	後継者の有無
年齢	〈作陶〉へのプラス/マイナスの影響の有無	親族以外からの後継者の有無
居住年数	〈作陶〉への具体的な《プラスの影響》	コロナ禍のプラスの影響
何代目か	b）販売	（3）里の観光と風景
世帯主の有無	〈販売〉へのプラス/マイナスの影響の有無	訪れる人々について
	〈販売〉へのマイナスの影響と売上の関係性	里の環境の印象
		里の風景について
		持続発展に必要と思う事業

3. 結果

(1) 属性

表-2　属性の構成

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
女性（13名）	1名	0名	2名	6名	4名	0名
男性（21名）	0名	2名	1名	3名	8名	7名
	10年未満	10年以上20年未満	20年以上30年未満	30年以上40年未満	40年以上50年未満	50年未満
居住年数	0名	2名	6名	6名	8名	12名
	5代目未満	5代目以上10代目未満	10代目以上15代目未満	15代目以上	その他	－
世帯主である（16名）	11名	0名	2名	2名	1名	－
世帯主でない（18名）	9名	0名	4名	1名	4名	－

44 窯元のうち 24 軒から 34 名分の回答が得られた。

属性の構成を表-2 に示す。60 代以上が 55.8%に上るが、20-30 代の世代の回答も一定数得られている。男性回答者が女性の 2 倍弱である。また、5 代目未満の比較的近年の窯元が過半を占める。

(2) コロナの影響

a) 作陶

図-1　作陶へのプラスの影響の有無（左）とマイナスの影響の程度（右）。

作陶にプラスの影響はないと回答した人が 68%に上るが、その反面 1/3 はプラスがあると応えていて興味深い（図-1 左）。一方マイナスが大きいという回答者は併せて 50%、小さいは 15%である（図-1 右）。

図-2　作陶への具体的なプラスの影響（複数回答）

作陶におけるプラスの影響は具体的には、「仕事に時間的な余裕ができた（7 名）」「展示会への出品を考えるようになった（4 名）」「伝統的な作り方をあらためて評価しなおすきっかけになった（4 名）」が比較的多い（図-2）。この間に新たな可能性を見つめ直す余裕ができたことがうかがわれる。

b) 販売

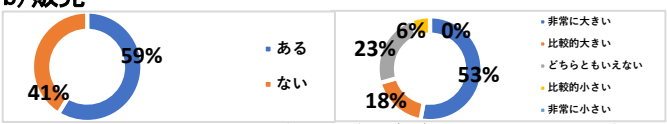

図-3　販売へのプラスの影響の有無（左）とマイナスの影響の程度（右）

販売へのプラスの影響があるという回答は 59%で

ある（図-3 左）。一方マイナスが大きいという回答者は併せて 71%、小さいは 6%である（図-3 右）。コロナの打撃は大きいが、それでもよい作用を認識する傾向も顕著である。

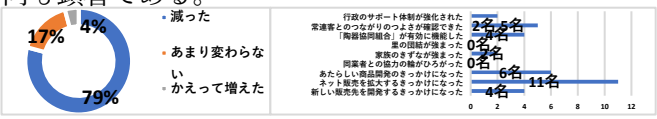

図-4　コロナ禍の売上の変化（左）とプラスの影響（右）

コロナ禍の影響により売上が減ったという回答は 79%である（図-4 左）。一方プラスの影響の内容は「ネット販売の拡大するきっかけになった（11 名）」「新しい販売先や常連客とのつながりのつよさを確認できた（6 名）」が比較的多い（図-4 右）。販売形態の見直しの機会に、コロナ禍がなっていると示唆される。

c) 今後の見通し

図-5　後継者の有無（左）と親族以外の受け入れ（右）

現在、後継者がいると回答した人は 42%に上る（図-5 左）。一方、親族以外から受け入れる可能性がある窯元が 25%に上る（図-5 右）。後継者問題は重要だが、回答者の積極的な姿勢もうかがわれる。

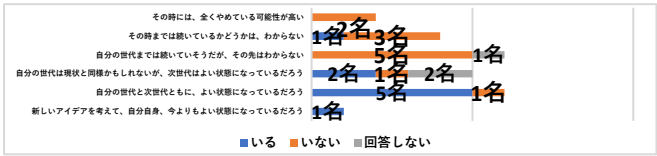

図-6　後継者の有無と窯元の今後の作陶の見通し（10 年後）の関係

図-6 は後継者の有無と窯元の今後 10 年後の作陶の見直しとの関係を示す。後継者がいる窯元はいない窯元に比べて将来への期待が顕著である（図-6）。

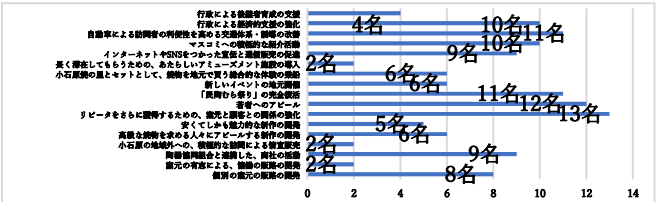

図-7　里の持続発展の要件

小石原焼の里の持続・発展の要件を問うと、「リピータの確保（13 名）」「若者へのアピール（12 名）」「交通体系の改善（11 名）」「民陶むら祭の完全復活（11 名）」「行政による経済的な支援の強化（10 名）」「マスコミへの積極的な紹介活動（10 名）」が比較的多い（図-7）。いかに新しい客層を獲得し、それを持続するかが重要と考えていることがわかる。

(3) 里の観光と風景

図-8　小石原に訪れる人々についての意見

里に「コロナ禍が終息したら、これまで通り訪れてほしい」という回答が 50%に上る（図-8）。また「コロナ禍以前にまして、多くの人々に訪れてほしい」が同じく 50%となる。この里の生業の特徴が反映しているものと思われる。

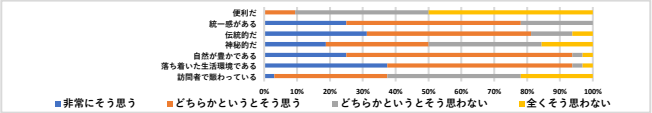

図-9　里の環境の印象

里の環境の印象をたずねると、「便利さが足りない」を肯定する割合が 90%、「伝統的だ」が 81%、「統一感がある」が 78%、「落ち着いた生活環境である」が 93%と非常に高い一方、「訪問者で賑わっている」は 39%にとどまる（図-9）。

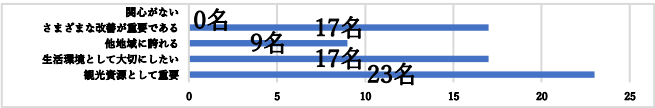

図-10　小石原焼の里の風景について

また里の風景についてたずねると、「観光資源として重要（23 名）」が最も多い（図-10）。住民の訪問者に対する期待の高さが理解できる。

4. まとめ

本研究はコロナ禍の続く中、中山間地域の陶芸の里の人々が、里の生業・観光・風景についてどのように考えているかの現状を調べた。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 仕事への時間的な余裕ができたことにより作陶において伝統工芸を見つめ直す時間が生まれた。
2) コロナによりマイナスの影響が大きいと思われたが、販売形態の見直しや積極的な後継者問題への重要度が顕著でもあった。
3) コロナ禍においても訪問者への期待は大きい。新規の客層を獲得し今後の持続に積極的に力を入れていることがわかる。

参考文献

1) 丸谷耕太・山下三平・ほか：小石原焼の里における作陶に関わる文化的景観の変容に関する研究，　都市計画論文集,49(1),2014.